
泣いた向日葵

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣いた向日葵

【Zコード】

Z2131D

【作者名】

封弥

【あらすじ】

何気に早起きをしてしまって、河原まで行く平次。其処に和葉も訪れる。遅くまで事件を解いていて眠いといった平次は、和葉に五分だけ寝ると言い眠る。…平次が起きた後、歩いて学校に向かっている途中、「顔が赤い」と言った和葉の言葉に平次は強く茶化すなど言つ。其のが和葉を動かして…

朝。煩わざる田覚ましが鳴り、俺は田を覚ます。

「また今日が始まつてしまつんか…。面倒や…オカン、飯くれへんか？」

「はいはい。何時くるさかい」

そう言ひぬの返事の後、俺は着替える。
着替えが終わり、朝食も済ませ家を出る。
珍しいぐらいに晴れている青空。
今は夏。あまりにも早く出過ぎたかもしれない。

河原に寄り道して、その河原の上に生えている草の上に体を倒す。
空には雲一つ無い。

この時期、良く雨が降ると思つたがかなり晴れている。

微睡みかけて、田を閉じた瞬間、誰かが俺を呼んだ。

「へーじつ」

「…和葉？」

「おはよ。今日は珍しく早いんやね」

「何か早起きしてしもてな」

「あたしも、妙に早起きしてしもてん。よくわかれへん」

そんな和葉も俺の隣に腰掛ける。

風が柔らかく吹いて、黄色いリボンで結われたポーテールが揺れる。

「平次」

「何や?..」

「向こうへ、見てみ?」

「あ?」

そう言つてよく田を凝らしてみてみると、隣の河原の方に沢山の向日葵が咲く向日葵畑が見えた。

綺麗やな、と和葉は呟く。俺も、綺麗やと一言言つて瞼を開じる。

「寝たらあかんの?」

「一寸ぐらこええやんけ。俺は昨日遅おまで事件といつて眠いんや」

「なり、もうちょい遅お起きたら良かったのに…」

「俺は早起きしてしまったんやから、少しごらい寝かせんかい」

「しゃーないなあ……五分だけやで? それ以上寝たら断然遅刻やからな!」

「へこへこ…」

そう言つて俺はすぐに瞼を閉じた。

草が心地よごぐらこに俺に当たる。

さらさら、さらさらと。

見慣れたはずの寝顔なのに、じつして此処まで愛しく思えるんだろう。

う。

目を閉じて繰り返される呼吸はとても静かで、草が揺れる音が聞こえるぐらこ

一体どんな夢…見てるんやろ、平次。

小さい頃の夢やろか。それでも、将来のことが夢となつたんやろか。小さくたつて大きくなつて、平次は変わらない。

「こつまで経つても…変われへんのやな、平次」

その寝顔に柔らかく微笑む。

ふと、時計を見たらもう五分経つた頃の時間を指していた。

あかん！早い所起いれな！

「平次。起きなあかんで」

「……もう五分経ったんか？」

「あたしも寝かけてたわ。さ、行こ平次」

そう言つて立ち上がる。

後ろにある向日葵畑を背中に、あたしたちは、学校へと向かった。

「平次は向日葵、好き？」

突然、あたしの口からこんな質問が出た。
ホント何気なしに喋つたような言葉。

「一応はな」

「一応つてな！もーちょい、はつきりとした返事くれへんか！？」

「いや…まあな…」

「平次？…顔赤いで？」

「茶化すなーーー！」

「「J…御免」

何故か突然謝罪の言葉が出た。

もしかしたら、あたしが怒らせてしもたんやろか。

怒ったようなその顔。あたしは、僅かに震えていた。

ホンマに…御免というその言葉が口から出ることもなかつた。

学校についても、あの怒った顔が頭から離れず空氣な氣分だつた。

「和葉？大丈夫？」

「うん、大丈夫やで。氣にせんでええよ」

「ホンマ大丈夫か？まさか、服部君となんか有つた？」

「ううん、何でもあれへんよ。いつものあたしやから…。一寸考え事しててん」

「和葉が大丈夫つて言つんやつたらいいけるな。あ、あたし先生に呼ばれてるから行つてくるな！」

そう言つて手を振る友達に手を振り返すことしかできなかつた。何で嘘なんてついたんやろ…。はつきり平次を怒らせてしまつたつたつて言つてしまえば…。

今日も平次は部活。あたし達は今日、部活がないから早めに帰ろうとは思つている。

でも…でも…平次にちゃんと謝らな。

学校について以来、平次と顔も合わせなければ、話もしなかつた。

氣まずい雰囲気の仲、あたしは平治の部活・剣道部を覗きに行つた。其処には、何時もと同じく汗をかいている平次が。

何故かそこで見ていられなかつたあたしは、体育館を抜け出し、朝平次が五分間眠つていた河原へと向かつた。

どうして、謝ることが出来なかつたんだろつ。どうして、素直に怒らせてしもたと友達に言えなかつたのだろつ。

後悔が募り、視界が滲む。

手で拭き取つても涙は溢れ続ける。

大分後ろで友達が見ているのも気がつかず、ずっと泣いていた。

(……和葉。やつぱり、服部君と何かあつたんや)

部活を終わらせ、着替えも終わらせて和葉を探そうと思つたがどうの和葉はいない。

「服部君」

そんな声が聞こえ、振り向く。其処には、和葉の友達が俯いた状態で立つていた。

どないしたんや、と聞いてみる。

しばらくの、静寂の後その友達は重い口を開いた。

「……和葉が…河原の方で泣いてた」

「泣いてたやと！？」

「うん…何て言つてるかよく解らんかったけど、何か…『何であったしは平次を怒らせてしもたんやろ』ってそんな感じのこと言つてたで？」

「その河原、何処や！？」

「うーん…向こう岸に向口葵畠がある河原やつた気が…」

「サンキュー」

そう言つて俺は走り出す。何時お前が俺を怒らせたんや！

和葉！ 一体何が原因なんや！

無我夢中で走り続け、河原に近づくにつれ、足音を立てないようこしてていた。

そして、河原に着く。

其処には、夕焼けに照らされてしゃくり上げる和葉の姿があった。

よくよく聞いてみれば、何でもあれへん…と言ひ俺の一言が原因らしい。

それで、和葉が自分の所為で俺が怒つたと想つた訳だ。

「何やつとんや。和葉」

「え！？ へつ… 平次」

「俺の一言で自分の所為にするなや。今回は俺が…悪かつた。スマ

ン、和葉」

「何で謝んの？ 謝らなあかんのは、あたし… やの」

「和葉の所為ぢやうわい。お前の友達から聞いたんや『和葉が… 河原の方で泣いてた』って聞いてん」

「だから… わざわざ走つてきてくれたん？」

「ああ。向日葵が泣いているのなんて見て、いられへんからな」

「向日葵が… 泣く？」

「和葉や。向日葵ちゅうんは」

「あ… あたしが？ そんなに輝いてもあれへんのに」

「和葉がどんな向日葵よりも一番、輝いとるんや」

そう言つた俺は一体、どんな顔をしていたのだろう。

柔らかい顔なのかもしねない。

褒め言葉にしては上等かもしねへん。

けど… 和葉は俺の言葉をどう受け取つたか…

すると、和葉は顔に笑みを浮かべ口を開いた。

「平次の方が何倍も輝いてんのに… な」

昨期の泣き顔は一体何処に消えたのだろうか。

向日葵が取つてくれたのだろうか。

つられて俺も笑顔になってしまつ。

和葉は、誰かを笑わせることが出来る凄い力を持つてゐるひゅう訳やな。

ホンマ…凄いわ、和葉。此処だけは和葉に負けてしまうんやな。
例え、剣道で勝つても、推理力で勝つても和葉の無邪気な笑顔
には負けてしまう。

そんな自分が些か悔しく思えた。

風にゆられて、向こう岸の向日葵が僅かに動く。

和葉の心も俺の心も一緒に動いていたのかもしねり。

F·i·n···

(後書き)

季節はすれで御免なさい。< / >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2131d/>

泣いた向日葵

2010年12月29日02時08分発行